



TITLE:

資料:1 霊長類における腎系血管の形態の比較(Ⅱ 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

児玉, 公道; 岡本, 圭史; 川井, 克司

CITATION:

児玉, 公道 ...[et al]. 資料:1 霊長類における腎系血管の形態の比較(Ⅱ 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1992, 22: 87-87

ISSUE DATE:

1992-10-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/164323>

RIGHT:

た。

TH陽性神経とLHRH陽性神経は正中隆起において互いに近接して存在し、よく区別できた。しかし、TH陽性の組織付近に頻繁に脱落が観察された。この解決法として銀増感法の改良と染色順序を検討中である。

C. 資料提供

資料：1

霊長類における腎系血管の形態の比較

児玉公道・岡本圭史・川井克司
(金沢大・医・第2解剖)

本研究は「霊長類の体幹および四肢筋の比較形態学的研究」という題目で資料提供を受けたものである。この研究は現在も継続中であり、特に3年度の課題とした骨盤出口筋の解析は下肢の解剖後になる為、現時点での報告は極めて不十分なものにならざるを得ない。そこで報告は同時に進行させていた腎系血管の研究について若干の知見を得たので表記の題目で以下述べることにする。

我々はヒトの腎系血管の形態を多数例で観察してきて、特に次の3つの血管に注目することによって形態学的理解を深めてきた。①深腎静脈(新称:骨盤より深層に位置して、通常の腎静脈とは別系統と考えられる)、②低位過剰腎動脈(2型を区別)、③後副腎動脈(新称:副腎の後面を外側へ走り腎周囲脂肪組織に分布)。ヒト以外の霊長類での腎系血管の形態の報告は乏しく、これらの比較解剖学的考察を進めるには実際に調べる必要があった。

今回解剖する機会を得た数種の霊長類(キツネザル・リスザル・タマリン・マカク類等)では、マカク類で①と③に関連する所見を得た。また、すべての例で腎動脈から副腎動脈が分岐していたがヒトで恒常的に存在する③の動脈及び上副腎動脈とそれを分岐する下横隔動脈は霊長類全体では恒常とは云えず、種によって様々な形態を示す。性腺動脈は大動脈からの分岐と腎動脈からの分岐例がほぼ半々で、キツネザルで大動脈からの分岐位置がかなり低いのが目を引いた。その他、キツネザルでは体壁系の動静脈が、タマリンでは消化器系動脈が、腎系血管と共同幹を形成していた。

なお②の動脈にはまだ出会っていない。また、腎門外腎上部へ入る腎動脈枝がヒトでは半数近くの例で認められるが、この枝もまだ認めていない。

今後は類人猿での所見や原猿の所見を加えることによって、霊長類全体の中での腎系血管の形態の変遷を追究してしていきたい。

資料：2

霊長類動脈系の系統発生学的研究

池田 章・藤本勝邦・吉井 致・
松本 真・太田茂男(川崎医大)

霊長類の動脈系の研究は、ヒトの動脈系を理解するために重要であり、各種霊長類に見られる原始的な形態がヒトの破格として観察されることもよく知られている。我々は、このような系統発生学的観点から、立体造形法を中心にして霊長類各分類群の動物系の解析を行っている。今年度はこれまでの観察に加えて、とくに霊長類の中硬膜動脈について知見をまとめた。霊長類の中硬膜動脈は内頸動脈系のアブミ骨動脈・眼動脈と外頸動脈系の顎動脈・浅側頭動脈から供給され、各動脈の発達程度により6型を認めた。I型:アブミ骨動脈が存在し中硬膜枝は同動脈より分枝する型で原猿キツネザル科に認めた。II a型:眼動脈からの硬膜枝が良く発達している型で原猿類ロリス科に認めた。II b型:浅側頭動脈と眼動脈からの硬膜枝が存在する型で真猿広鼻猿のマーモセット科に認めた。以上の型では顎動脈からの中硬膜動脈(=MMA)は認められない。III型:良く発達した眼動脈からの硬膜枝と発達の悪いMMAが存在する型で狭鼻猿クロザル、シルバールトン、ゴリラに認めた。IV型:眼動脈からの硬膜枝とMMAが同程度に発達している型で狭鼻猿マカク属に認めた。V型:眼動脈からの硬膜枝は発達が悪くMMAの発達が良い型で狭鼻猿ドグエラヒビに認めた。VI型:MMAが主となっている型で狭鼻猿ゴリラに認めた。ヒトの中硬膜動脈は顎動脈から分枝する型、眼動脈から分枝する型、内頸動脈から分枝する型が知られており、特に眼動脈からの硬膜枝の発達度と関連し種々の変異が知られているが、それら変異は全て上記の6型に含まれる。ヒトのMMAの前頭枝は本来、II~IV型に認められる眼動脈の硬膜枝がMMAに組み込まれたものと考えられる。II b型で認められた浅側頭動脈からの硬